

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23720230

研究課題名（和文） 電子化された日本語研究論文情報の流通・活用に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Basic Study of Online Research Papers in Japanese Linguistics

研究代表者

茂木 俊伸 (MOGI Toshinobu)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：20392540

研究成果の概要（和文）：

本研究では、インターネット上に流通している学術情報の活用を円滑化するために、日本語研究論文情報の流通実態を調査するとともに、現状における問題点を明らかにし、問題を解決する方法と日本語研究者が果たすことができる役割について考察した。主たる成果としては、日本語研究論文の電子化の実態を明らかにしたこと、および、情報流通の基盤としての文献目録（「とりたて」関連研究文献目録）を作成し、評価を行ったことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：

This project investigates (1) how many research papers in the field of Japanese linguistics are currently available on the internet and (2) the problems that occur when users attempt to access these papers.

In addition, the project proposes the construction of a bibliography linked to online research papers as a method for resolving these problems and conducts an evaluation of this bibliography's success in resolving these problems.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|---------|---------|---------|
| 交付決定額 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：論文の電子化、学術情報の流通、機関リポジトリ、CiNii Articles、オープンアクセス、とりたて、文献目録

1. 研究開始当初の背景

人文系の研究分野では、理系分野に比べて、インターネットを活用した学術情報の公開・利用が進んでいないと言われる。

日本語学(国語学)分野でも、研究機関による論文データベースの整備が進みつつあるが、日本語に関する研究論文(日本語研究論文)の電子化やその活用の取り組みは、過渡期の段階にある。

このような背景から、「日本語研究論文の情報はインターネット上のどこで、どの程度

入手できるのか」というような、電子化された論文情報の流通の実態を明らかにしようとする「研究の研究」はこれまでなされてこなかった。したがって、日本語研究者は、研究成果の電子化は重要であり、インターネット上の情報を便利だと感じつつも、自ら生産した研究成果に関して、「現在どれだけの情報がインターネット上に流通しており」、「それはどのように活用でき」、「現状の足りないところをどのように補うべきか」といった点を把握していない状況にある。

研究文献の電子化に関わる研究は、従来、

図書館情報学の領域を中心として行われてきたが、日本語学の領域においても、学術情報の取り扱いや研究基盤の整備といった問題に、日本語研究者自身が積極的に関わっていくスタンスが強く望まれる。具体的には、学術情報の利用者でもある日本語研究者が、その流通においてどのような役割を果たすことができるのか、ということを検討していく必要がある。

例えば、日本語研究論文の電子化・流通に関しては、大学や研究機関、学会組織等、さまざまなレベルでそれぞれの目的に沿った活動が行われているものの、それらの活動の成果を利用しやすい環境を作る取り組みは十分に行われていない。このような状況の改善に日本語研究者自身がどのように貢献できるかという点も、現状では問題となっていると言える。

2. 研究の目的

本研究では、1. で述べたような状況を改善していくためには、次の(1)(2)のような調査・研究が必要であると考えた。

- (1) 電子化されインターネット上で公開されている日本語研究論文情報の実態を把握する。特に、論文の本文情報の流通実態を明らかにする。
- (2) そのうえで、情報と情報とを有機的につなぎ、それらを日本語研究のために有効活用できるような手立てを考える。特に、日本語研究者が情報の流通にどのような役割を果たすことができるのかを考える。

そのために本研究では、「しらべる」、「しぼる」、「つなぐ」という3つのキーワードを設定した。本研究の目的は、日本語研究論文の流通実態を「しらべる」こと、および流通している情報を適切に「しぼる」とともに、有効に「つなげる」ことである。

まず、「しらべる」とは、文字通り、上記(1)に示した、日本語研究論文の情報の電子化に関する実態調査を指す。

先にも述べたように、日本語研究論文の電子化の過渡期にある現在、特に論文の本文情報がインターネット上のどこでどの程度公開されており、研究者が入手可能な状態になっているのかを把握することは、研究基盤を整備するための基礎データとして有益であるだけでなく、教育等のさまざまな分野に応用が可能である。

次に、「しぼる」とは、インターネット上の膨大な量の情報を精査し、質の観点も含めて必要な情報に絞り込むことを指す。

学術情報の流通において日本語研究者が

最も貢献すべきポイントは、その専門性を活かして情報の質と精度を高めることにあると考えられる。具体的には、日本語研究論文に関するインターネット上の情報の収集・絞り込み・加工の過程で生じる問題点の検討や評価を行うこととした。

最後に「つなぐ」とは、絞り込まれた情報を有機的につなぐ集約拠点（ハブ）としての文献目録を試作し、1つのページから論文の全文情報にアクセスしやすい環境を整えることを指す。

検索エンジンを単純に検索しただけでは到達できない「深層ウェブ」に置かれた論文情報にもアクセスできるような「つなぐ」文献目録のモデルを検討し、実際に目録を作成するとともに、その評価を行うこととした。

以上のように、本研究は、日本語学の観点から、日本語研究と図書館情報学にまたがる学際的領域を新たに開拓するものである。上述の3つのキーワードに沿って研究を展開することによって、日本語研究者が学術情報の流通において担うことのできる、あるいは主体的に担うべき役割を明らかにすることをねらいとしている。

3. 研究の方法

2. で述べた目的を達成するために、本研究では、次のような3つのサブテーマを設定した。

- (1) 日本語研究論文に関する諸情報（論文本文、目次等）の電子化の実態把握と、その分析
- (2) 電子化された論文情報の情報集約拠点（ハブ）としての文献目録モデルの作成と評価
- (3) 以上の成果を踏まえた、インターネット上の日本語研究情報の活用法の検討

まず、サブテーマ(1)は、先のキーワードの「しらべる」研究に該当する。

ここでは、申請者が2010年1月に行った予備調査（その詳細に関しては、茂木俊伸（2010）「日本語研究論文情報の電子化の実態と論文探索スキル」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』7、を参照）の枠組みを利用し、『国語年鑑』の情報をもとに、研究論文情報の電子化の実態調査を行った。また、研究機関や学会ごとの論文データベースの整備状況や、各種データベースにおける論文本文の公開状況、さらに、学会誌論文を機関リポジトリに登録する際の条件といった、日本語研究論文の電子化に関わる調査を実施した。

次のサブテーマ(2)は、先のキーワードの「しぼる」「つなぐ」研究に該当する。

インターネット上の情報集約拠点として利用できる質の高い二次資料のモデルとして、研究代表者の専門分野である日本語文法の「とりたて」「係助詞・副助詞」をテーマとした電子版文献目録を作成するとともに、その評価を行った。

最後のサブテーマ(3)では、上記(1)により明らかになった日本語研究論文情報の流通実態と、上記(2)の文献目録の作成過程で明らかになった問題点から、日本語研究論文情報の電子化に関する現状の分析と、よりよい活用の方法について考察した。

4. 研究成果

本研究の主な成果としては、

- (1) 日本語研究論文情報の電子化が CiNii Articles および機関リポジトリに大きく依存していること、また、研究者の論文情報の入手行動から見て情報へのアクセスが確保されないケースがあること、の2点を具体的な実態として明らかにしたこと
- (2) この問題点を解決する情報基盤としての文献目録モデルの提案と、文献目録の作成・評価を行ったこと

を挙げることができる。

上記の成果(1)に関しては、次の5. に示す雑誌論文①②において、調査・分析の結果を公表した。

論文②では、日本語研究論文の電子化とそれに対する入手行動に関する先行研究を整理するとともに、関連学会の学会誌の電子化に関する調査を行い、日本語研究論文の情報が CiNii Articles (旧 CiNii) を中心として流通している実態と、そこで生じ得るアクセス上の具体的な問題点を示した。

ここで示した問題点とは、(a) 日本語研究論文の掲載媒体として中核を担う紀要に CiNii Articles 未収録のものがあること、(b) CiNii Articles 以外の経路を使うことで機関リポジトリや大学ウェブページから本文が入手できる紀要が一定数あること、(c) CiNii Articles 経由では学会誌の本文が入手しにくいこと、(d) 研究機関の論文データベースには本文が収録されておらず、CiNii Articles との連携も取れていないこと、(e) 機関リポジトリには「深層ウェブ」問題が見られる場合があること、である。

論文②ではさらに、研究者による「つなぐ」文献目録のモデルを示した。当該分野の研究者が「しぼる」作業を行って作成した文献目録が、精度の高い論文情報を提供する役割を果たしてきたことは従来指摘されているが、インターネットの特性を活かして、分散して

いる論文情報を「つなぐ」役割を文献目録に担わせることで、上で指摘した問題に対応する手段としての有効性を持つと考えた(このモデルを検証した論文①の内容に関しては後述する)。

また、上記の成果(2)に関しては、論文②で示したモデルに基づき、インターネット上に「とりたて」関連研究文献目録」を作成・公開(2012年3月～)し、その充実に努めた(この文献目録の URL は次の5. の〔その他〕に示す)。

これは、可能なかぎり論文の本文情報へのリンクを設けた文献目録であり、最終的に、当初の計画を上回る2000年～2013年の文献計664編の情報を掲載したものとなった。また、利用者からのフィードバックを受け、今後の改訂・拡張に関する課題を整理することができた。

論文①では、この文献目録の2003年～2012年分のデータを用いて、学会誌・紀要等のとりたて研究論文の約45%の本文が電子化されていること、また、紀要論文は新しいものほど本文を入手しやすく、その公開場所が CiNii Articles から機関リポジトリへと変化していることなどを明らかにした。

さらに、先にも述べた日本語研究者による「つなぐ」役割に関して、今回作成した「とりたて」関連研究文献目録」が、CiNii Articles 経由で入手できない論文約23%へのアクセス性の向上に貢献することを示した。これにより、本研究において論文②で示したモデルの有効性が確認できたものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 茂木俊伸 (2013) 「電子化された日本語研究論文の流通実態と「つなぐ」文献目録によるアクセス支援」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』10, pp.29-35, 鳴門教育大学. (査読無)

<URL1>

<http://www.naruto-u.ac.jp/journal/info-edu/>

<URL2>

<http://www.naruto-u.ac.jp/repository/metadata/453>

- ② 茂木俊伸 (2012) 「電子化された日本語研究論文の流通実態と問題点」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』9, pp.23-29, 鳴門教育大学. (査読無)

<URL1>

<http://www.naruto-u.ac.jp/journal/info->

edu/
<URL2>
[http://www.naruto-u.ac.jp/repository/
metadata/410](http://www.naruto-u.ac.jp/repository/metadata/410)

[その他]

「とりたて」関連研究文献目録
<URL>
[http://www.naruto-u.ac.jp/facultystaff/
tmogi/fp_biblio/index.html](http://www.naruto-u.ac.jp/facultystaff/tmogi/fp_biblio/index.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

茂木俊伸 (MOGI Toshinobu)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准
教授
研究者番号：20392540

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし